

## 2. マクグラスと自然神学構想

Alister E. McGrath, *The Open Secret. A New Vision for Natural Theology*, Blackwell, 2008.

### A. マクグラスの自然神学構想

### B. 第三部 真理、美、善

—自然神学の革新のための基本方針(agenda)

### 第九章 真理、美、善

——自然神学構想を拡張する（＝第三部の序）

- (1) 第三部の目的・意図
- (2) 自然神学の射程
- (3) 啓蒙主義批判の系譜
- (4) 自然への包括的アプローチと無神論への応答
- (5) キリスト教自然神学の伝統とその再建

## 5. マクグラス——第10章：自然神学と真理

- (1) 共鳴、証明ではなく：自然神学と理解可能化
- (2) 大きな描像、ギャップではなく：自然神学と世界の観察
- (3) 自然神学、直観に反した思考と人間現象
- (4) 自然神学と数学：実在を記述する「自然な」仕方
- (5) 真理、自然神学と他の宗教的伝統
- (6) 真理の豊かさの回復
- (7) 真理と想像力の自然神学

### <コメント>

1. トランス → マクグラス：イギリス自然神学の現在のライン  
神の自由（偶然性）→偶然的世界の合理性（知解可能性）  
↓  
キリスト教とプラトニズムの関係についての本格的議論を必要とする。  
数学の意味（ペンローズ）、キリスト教思想にとって数学とは何か。
2. ギャップの神からの脱却、この文脈で、結局、超自然とは何か？
3. 人間原理は、世界システムの根拠付けが、世界の内部あるいは外部で可能になるのか  
についての理論的考察が必要。 → システム論・言語論の必要性（後期）
4. 特殊伝統的で伝統超越的な合理性（普遍性）→宗教の神学  
・認識論と存在論      ・包括主義  
マクグラスは啓蒙主義を超えたのか？
5. ルイスとトールキンへの言及。 → 文学とキリスト教思想。
6. 真理概念の問い直しの問題  
理性と想像力 → ハイデggerのカント解釈  
↓  
美の問題へ、想像力から倫理・善へ：  
リクールによるイエスの譬え解釈（後期）

## 9. マクグラス——第11章：自然神学と美

前章では、人間の知覚を、本質的に知的な理解のプロセスという点からのみ特徴付けることについて、その正当性と限界の両面を確認した。この知覚という出会いが情動的次元をもっており、キリスト教自然神学において表現されねばならないということは、ずっと以前より認識されてきたことである。自然に対する人間の応答は、「驚き」、「畏怖」、「恐れ」、「美」といった感情を含んでいる。これらのいずれも、啓蒙主義の特徴である自然に対する知性化された応答と同一視することも、それに還元することもできない。

1. 現在、自然界の科学的説明における美の位置について関心が増大しつつある。  
美的なものの生物学的重要性がますます認められるようになってきており、生物の生殖と進化に対するその含意が注目されている。「美は生命が自らを永続化させる仕方の一つである。美を愛することは、生物学に深く根ざしている」。
2. 本章では、この自然との情動的な関与を探求し、それを自然神学の内にどのように組み込むことができるかについて検討するために、「美」というカテゴリーが用いられる。美は、いくつかの点で議論するに難しい観念である。それは、とくに、定義や美的判断の客観性の問題に関連した困難さによるものである。  
↓  
「美」の観念が有意味であり続けることは明らかである。美の観念が自然神学においていかにして回復されるを考察すること。

### (1) 自然神学における美の場所の回復

3. 世界の美やその神学的重要性を強調する主張が、教父時代や中世のほとんどの著述家において見られる。彼らは、この美を本質的に喜ばしいものとして称賛した。自然には、美の十全な開示の探究を導いて神の内にあるその源泉と成就の発見に至らせる潜在的な力があると主張されている。
4. アウグスティヌスの『告白』を貫いて響いている。美を愛することは、置き換えられた神への愛である。神が創造した美についてのたぐいまれなる洞察によって、アウグスティヌスは彼の内に神を見出すように導かれた。けれどもそうすることにおいて、彼は自分が神より遙かに隔たられ、似ても似つかぬ境地 (*in regione dissimilitudinis*) にあることにも気付いたのである。自己知にはその場所がある。しかしながら、美は贖いの代替物ではなく、その前提条件なのである。
5. 美はアウグスティヌスの成熟期の著作の主要テーマである。この超越的で同時に内在的な美は、創造の秩序の内に表現されている。神の創造の美を称賛することは、神のより偉大なる美を称賛することなのである。
6. それは、キリスト教神学の至るところで鳴り響いているテーマである。古い世代の神学者は、美の範疇の重要性と、神的なものを開示する自然の能力を理解する際に、美の果たす役割とを強く感じ取っていた。

中世は、信仰と神学双方の美的次元に価値を認めるという深い関心によって特徴付けられるのである。ウンベルト・エーコは、中世美学の詳細な研究において、このような美を強調することに至った要因を分析している。

第一に、多くの聖書テキスト、とくに知恵の伝統からのテキストにおいては、世界は秩序づけられた仕方で創造されたと語られた。これらの内でとりわけ重要なのは、知恵

S. Ashina

の書十一章二〇節である。すなわち、「あなたは、長さや、数や、重さにおいて、すべてに均衡がとれるように計らわれた」。この節は、自然秩序が美と善の具体化と見られる様式(modus)、形(forma)、順序(ordo)によって特徴付けられることを意味するものとして、広く解釈された。

第二に、偽ディオニュシオス・アレオパギテースの著作は、美の重要性に対する省察のきわめて豊かな源泉となり、中世を通して広く読まれた。たとえば、トマス・アクィナス。ディオニュシオスの『神名論』(Divine Names)は、世界を「第一原理からほとばしる美の滝、すべての被造物の中で多様化する感覚的な光輝の見事な輝きとして」提示している。被造的秩序の美がその創造者である神の美から直接生じるというアクィナスの議論は、ディオニュシオスの神的な美に対する広大な省察に概念的統一を与える試みとして、またアクィナス自身の神学的基本方針、すなわち神と被造物との間の類比を主張する手段として理解できる。

7. 自然神学に対するその含意がまだ十分に探求されていないとはいえ、最近数十年、美の意義の再発見が目撃されている。ハンス・ウルス・フォン・バルタザールは、美の神学が近年刷新されつつあることに刺激を与えそれを準備した。

美が把握され理解されるためには、形式が要求されるという論点。創造と受肉の概念の神学的意義。神の特性と可触的で可視的な世界との間に相関そして結合が存在することを提起するからである。自然とキリストはいずれもそれ特有の仕方で神的ロゴスを開示する——もちろん、見る目をもつ人々に対してではあるが——。ヨハネ福音書のプロローグにおいてこれらの教理が相互に関連していること。

8. キリスト教信仰の内側から観察するとき、自然界は新しい光の下で「見ること」が可能になり、その美のより深い理解へと導かれる。それゆえ、自然神学は自然的秩序の美に敏感であり、それを肯定し、その神に与えられた特性の一側面と見なす。

## (2) 美の軽視：ジョン・ラスキンの「脱回心」

9. ジョン・ラスキン(John Ruskin, 1819-1900)：イギリスのビクトリア朝文化の最も重要な人物の一人であり、事物をありのままに見ることを強調したことで有名。「われわれのこの悲しむべき世界において、われわれは幾度となく闇——それはすべてのものの内で最大の贈り物である——の中で見ることを、ともかくも見ることを望む。どんな光によるにせよ、ただわれわれは事物をありのままに見ることができるのである」

一八三二年、シャフハウゼンにおける超越的なものの啓示的な体験。そのときラスキンは、アルプスの夕日の光景の中に、「地上の美の啓示……その書物の第一頁の始まり」を見たのである。

10. ラスキンの画期的作品『近代画家論』(Modern Painters)の第一巻は、自然の真理の研究に捧げられた。この著書は、ターナー(J. M. W. Turner, 1775-1851)の様式を擁護したことで有名。

自然に対する彼の忠実さにある。ラスキンの評するところによれば、他の画家たちは、「子どものように自然を模写し、かれらがそこに実際に見たものではなく、そこにあると知っていたものを描いている」。芸術は事物を現にあるがままに描く方法と理解されるべきであって、事物に人間の慣習的な美を押しつけるのではなく、その固有の美と構成を引き出さねばならない。

11. 初期のプロテスタント的信仰→美しい事物が潜在的に偶像的である。

絵画の美やすばらしい音楽について熟考したとき、ラスキンは、このような力と美があるいはその創造者の栄光に反するものとなるのではないかと問わざるを得ないことに気づいた。

12. 「神は、顔を美しく手足を壮健にし、これら未知の激しくすばらしいエネルギーを創造し、物体の見事さとそれへの愛を創造した。また金や真珠や水晶、そしてそれらを輝かせる太陽を創造した。また、人間の想像力をすばらしい思想で満たし、人間がその設定し輝かし完成させる力に触れることを許した。しかし、神がこれらものを創造したのは、もしこれらすべてのものが被造物を創造者なる神から引き離すことさえなければ、ということではなかったか。」\* (25)
13. ラスキンの精神には、明らかに一つの危機が高まりつつあった。つまり、美が偶像の源となるのではないかというプロテスタント的な懐疑と、トリノの豊かな芸術と建築の遺産をじっくり見つめたときに感じた美的な驚きとの間の裂け目である。

↓

プロテスタント的信仰が美的には不適切であると宣言するかのような美と驚きに直面して、彼は何ができたであろうか。→「脱回心」という大胆な行為において、彼は美に従い、プロテスタントを後にすることを選んだ。

「わたしは教会から出た。要するに 20 年間考えていたことから離れた。それは、最終的には回心せざる人間となった」。

14. なぜ彼は、理性がある方向に引っ張り、美と想像力は別の方向へ引っ張ると信じたのだろうか。もし、すべてが神に由来するのであるならば、なぜすべてが神へ導くとはかぎらないのか。
- 啓蒙主義が理性の優先性を誤って強調したことを除いて、その理由はない。なぜなら、理性は、もっぱら自然的秩序の観察された合理性の観点から、自然神学について考えるように人を導くはずだからである。

### (3) ヒュー・ミラー、理解することにおける美的な欠如

[268/3-269/1]

15. 多くのビクトリア朝の教会指導者たちは、自然神学者としてのウィリアム・ペイリーの業績を永遠に残る重要性があるものと見なした。一八七一年に、「未来の自然神学」という講演で、チャールズ・キングズレー (Charles Kingsley)は、ペイリーを偉大な自然神学者として讃え、ダーウィンの進化論は神的な創造のメカニズムを単に解明したに過ぎないと論じた。「われわれは古くから、神は非常に賢明なので万物を創造することができるということを知っていました。しかしご覧なさい。神はそのことと比べても遙かに賢明なのです。なぜなら、神は万物が自己生成できるようにすることができるのですから」。
16. 『自然神学』において自然の固有の美を認めながらも、ペイリーの興味は究極的には別のところにある。彼が論じるには、自然は第一に一つの「考案 (contrivance)」と考えられねばならない。自然は、計画され作り上げられたもの。時計の類比。それは、自然のメカニズムがその計画者の知恵そしてその建設者の腕前を証言するものであり、自然の内に計画の明らかな証拠が存在することである。考案は目的を含む。自然神学は、世界を見事に計画され注意深く組み立てられた機械と考えることによって、最善の仕方で企てるのが可能になる。

S. Ashina

17. しかしながら、機械は不細工なものにもなり得る。自然界の美を、このような欠点ある類比によって、いかに適切な仕方でも適合し表現することができるのだろうか。それがスコットランドの地質学者ヒュー・ミラーの判断である。ミラーは、他の人々が自然の秩序付けと知解可能性を強調したのに対して、彼が「自然の詩」と呼ぶものに焦点を合わせることを選んだ。科学はこの詩によって靈感を与えられ、啓発されるのである。「自然は記号が記された大きな板であり、それを読むときに、精神の中で詩になる」と、彼は書いた。
18. ペイリーに続く世代における自然神学の方向転換に対して、ミラーの行った特別な貢献は、人間が自然を自らのものとする事についての解釈にある。人間の芸術は、自然界において顕わになったのと同じ根本的な建築原理を反映している。創造者の精神と自然観察者である人間の精神とは合致する。しかし、なぜなのか。
19. ミラーが論じるには、この一致あるいは共鳴は獲得されたものではなく、神の像において創造されたことの帰結として、人間の合理性に生得的なものなのである。自然のパターンは神的創造と見なされねばならない。ミラーにとって、アンモナイトの殻あるいは旧赤色砂岩 (*Murchisonia Bigranulosa*) の複雑さと美は人間の計画性をはるかに凌駕している。ウェストミンスター大修道院やカンタベリー大聖堂の精密な計画と比べてもなおそうなのである。
20. 風景がしばしば人間の内に力強い美的な応答を呼び起こすことが知られている。一つの可能性は、これが進化の結果として人間の脳の中にその配線がしっかりと作り付けられているという説明である。それらは、自然神学の信頼できる説明の中に自然界に対する人間の応答の美的次元を組み込みことが重要であることを、示唆しているのである。

#### (4) ジョン・ラスキンと自然の描写

21. われわれは、自然を適切に「見る」ことへのラスキンの関心。自然に対するラスキンの態度は、芸術あるいは自然に介入する度合いの低い科学（自然史や地質学といった）における自然の正確な描写が超越的なものへの接近を可能にする真の審美眼をもたらすというものである。このような仕方では、神の栄光は自然を通してほとんど直接的に出会うことができる。この際に、自然は、創造者の象徴、メッセージ、賜物と見なされねばならない。しかしながら、ラスキンの知覚の説明においては、媒介物を介在させることなしに、自然と直接的に出会うことができる人間の能力に強調点が置かれている。
22. ラスキンは観察者の介入を最小限に押さえることによって可能な限り自然現象に密着しようとしている。ラスキンが望んでいるのは、感覚と知覚との単純な対応として理解された、真理そのものに到達することなのである。また彼は美を見、それを描きたいと思った。なぜなら、美は第一に現象に内在すると信じたからである。さらにラスキンが、人間の知覚における社会的構築の役割についての認識はすべて、実在を歪ませる力を持ち、それゆえ彼の美と真理の理論を覆すものであると見なしていたことは明瞭である。
23. ラスキンのアプローチに伴う困難さ。T. S. エリオットの『四つの四重奏曲』 (*Four Quartets*) の一節において要約することができる。「……人間は実に実在に耐え得ない」。実在はそれに対処する人間の能力に適合させられる必要がある。これは経験の複雑さを組織し分析するためのスキーマの使用に関わっている。しかしながら、ラスキンはこのような仲介物なしに直接自然界と出会うことを強く主張する。

24. 自然の实在を歪曲するという恐れから、ラスキンは知覚プロセスが可能な限り構築から自由であるべきであると主張するようになった。ラスキンは、現象に可能な限り接近するという関心に基づいて、観察者の押しつけを最小限に抑えようとしたのである。最終的に、それはラスキンの精神的衰弱に至った。なぜなら、心理的スキーマは環境を秩序付け予測可能にすることによって精神的安定性の維持において重要な機能的役割を果たしているからである。
25. 自然の複雑さを直接「見る」という彼の試みは、自然の知覚を高めるのではなく、自然を知覚する彼自身の能力を圧倒するものとなった。ラスキンは、現象へ直接接近するという自分自身の要求に対処できなかったのである。
26. 見てきたように、もし、精神が感覚的な対立や混乱という潮汐波に飲み込まれるのを回避できるとするならば、知覚プロセスはこのような介入を要求するのである。自然科学における理論の役割は、知覚におけるスキーマと平行な位置にあると見ることができる。

### (5) 理論的な自然表現の美

27. 美が科学理論の発展と評価における基準として重要であるということは、理論的な優美さをいかにして説明的な徳として位置づけることができるかについての論争が未解決であるとしても、かなり以前から認められてきた。

たとえば、美的考察は太陽系のコペルニクスのモデルや特殊相対性理論を確固なるものとする際に、重要な役割を演じた。

難点：何が形而上学的に信憑性があり、あるいは実際に自明であるかについては、時代ごとに独自の見解が存在。

しかしながら、「理論と予想との調和が明らかに美的な満足を生じる」という提案については、ほとんど疑いなく、証拠をあげてその正しさを説明することができる。

28. ユークリッド幾何学の概念的な優美さはその主要な美徳の一つと見なされ、古代ギリシャの自然学者の空間理論の基礎として受け入れる上でその触媒となった。

アイザック・ニュートンによって一七世紀に提示された力学方程式はその驚くべき優雅さが十全に顕わになるには、ハミルトンのあるいはラグランジュ的な形式主義によるシンプレクティック幾何学の到来を待たねばならなかったとしても、ニュートンの自身時代において、単純かつ優美なものが見なされていたのである。

この際限なく続けることが可能なリストには、容易に多くの他の事例を追加することが可能。

ここから、科学哲学者の中には、次のような議論を行う者がある。すなわち、優雅さといった美的性質は、科学理論を評価する際に、とくに、競合する理論が同等の経験的適切性をもつ場合に、重要であるのだから、美的性質は、理論自体に固有のものと見なされねばならない、と。

29. より控えめなアプローチ：美と真理との経験的相関性を強調したマイケル・ポランニー。「偉大なる科学理論の断定は、ある程度は歓喜の表現である。理論ははっきり分節されない要素をもっており、それによって自らの美を称賛しているのである。これは、理論が真であるとの信念の本質をなしている」。「科学的美の感覚」は、実在的なものは美しいものでもあることを認める。

↓

ポランニーはこれが数学において最高の仕方で示されると見ており、数学の「知的美

S. Ashina

は、その概念の实在性とその主張の真理を表す」と論じている。理論の知的優美さが实在に対応していることの指標である。「間違っているならば、科学理論は美しくない」。

この見解は、優美さや美という観念の文化的な位置づけを、当然しかるべきほどには重視していない。多くの歴史家は、科学者がもつたいていの美的確信、たとえば、一様な円運動がすべての中で最も美しいというアリストテレス的学説が現実には知識の進展を妨げることで終わる、と論じるであろう。

30. しかし、なぜ美は真理に対するある種の基準でなければならないのか。結局のところ、美的判断が長い間に変化を被りやすいことは周知のとおりである。太陽系について、プトレマイオスの地球中心モデルとコペルニクスの太陽中心モデルのどちらが、より美しいのか。

↓

次のように論じることは可能であろう。もし、「われわれの理論の美はわれわれが自然の根本法則に接近しつつあることを示している」というのが事実であるならば、「美は真理のしるしである」。しかしながら、どちらの美的特質が科学理論の真理の指標なのか、あるいはこのような基準は理論を吟味し選択するプロセスの内にいかにして組みこまれるのか、ということ、自然科学が確認してきたという証拠は今までのところほとんど存在しない。ここに本当の困難がある。

31. 自然科学における美の役割についての一つの説明は、テオ・カイパーズ(Theo Kuipers)によって、二〇〇二年に提出された。このモデルに基づけば、この結合が実りあるものであるとわかる理論的状况に以前遭遇したことがあるという理由から、科学者は「美」と「真理」とを関連づけるのである。問題の関連性は、それが過去の成功した理論の諸特徴に根拠づけられているという点において、恣意的ではない。

ポール・サガード(Paul Thagard)は、理論との関係における「美」の知覚がその首尾一貫性への直接の応答であると論じている。「科学者は、このような諸特徴をもった理論が首尾一貫性に対して貢献するという理由から快いということがわかる。なぜなら、首尾一貫性は本質的に快いものだからである」。

32. 懐疑的な者。ジェイムズ・マカリスター(James McAllister)は、「美」の概念が係争中であることを指摘する。一定のデータに基づいて、美的に魅力的に見えた理論の諸特性はすべて、またほかの時には、結果的に、不快を生じる、あるいは客観的に中立的であると判断されてきた。理論は本質的に合理的基準において受容されるが、その場合、美的基準はその後に、しばしば理論の成功を振り返った説明として関係づけられるのである。彼の議論によれば、美は振り返ったときのみ、成功の蓋然性の前兆とされるのである。

33. このように討論は結論に至らないものではあるけれども、それにもかかわらず、それらは科学的共同体に深く根差した直観、すなわち、たとえ、その関係性の仕組みと妥当性が不明瞭であったとしても、美は真理へ導くものであるとの直観を反映している。新しい自然神学に対してこのようなアプローチのもつ可能性は明らかであろう。もし、世界と人類の両者が同一の神的な建築術を具体化するものと見ることができれば、おそらくわれわれは、真の理論が「神の精神」の美を反映することに驚くべきではないだろう。なぜなら、世界と人類はそれらの真理と美を通して神の精神の美について証言するものだからである。

## (6) 美と畏怖、そして自然への美的関与

34. 最近まで、美学。バウムガルテン(Alexander Gorrlieb Baumgarten, 1714-60)の著作において見られるような主題に対する一般化された哲学的演繹的なアプローチによって、支配されていた。彼の実際の意図は、人間の感覚的経験を包括するように「合理性」観念を拡張することであったと思われる。実在についての人間の経験は、論理分析が認めるよりもはるかに大きなものであった。もし、合理主義が抽象的な一般化の集積にすぎないものとなることを避けるべきであるならば、美の経験のために場所を見出すことは絶対に必要であると思われた。

35. しかしながら、この理論的アプローチにおいては、人々が何に魅力を見出すのかという経験的問いにほとんど注意が払われなかった。

↓

グスタフ・テオドル・フェヒナー(Gustav Theodor Fechner, 1801-87)は、美学への経験的あるいは帰納的なアプローチを展開することを試みた。

「上からの美学」：美の一般的原理を美的経験の対象と美的享受の事実から解放しようとした。

「下からの美学」：フェヒナーは、人々が現実に美しいと感じるものの経験的分析に基づいて、と名付けるものを発展させることを試みた。これは、何が美を規定するのかという問いを解決するものではないけれども、美の生物学的また心理学的側面についての関心の高まりを促進し、自然界への関与における美の重要性の意識の増大させるものとなった。

36. 自然の美に対する美学の関与は、驚くほどゆっくりとしたものであった。比較的最近になっても、美学はしばしば芸術の哲学に限定的なものとして理解されており、自然的秩序自体に対する人間の応答の重要性は見過ごされている。

- ・一九六六年の画期的な論文において、ロナルド・ヘップバーン(Ronald Hepburn)は、自然的秩序に対する美的関与の重要性を主張し、人間の自然の経験と芸術の経験とが区別されると彼が信じる二つの仕方について詳しく説明した。
- ・近年、環境的責任に対する動機づけとして自然の美を理解することの高まりへと応答するということがあって、人間の自然の美的認識をいかに理解すべきかということに関して、理論的に注目されることが多くなってきている。

37. 観察者の自然への没頭がもつ美学的重要性を強調する者もいるし、また美学は、観察者内部に情動的な「覚醒」を生み出すという観点から自然がより良く解釈されると示唆する者もいる。

第三のアプローチ：自然との適切な関わりが「審美眼のある理解不可能」に至ると論じられている。それゆえ、「神秘」という範疇は、人間精神が観察されたものを十全に把握できないことに対する適切な応答であるが、応答を形成するに際して分析も想像も行う人間精神の能力を触発するのである。

38. このテーマは、「畏怖」の情動の最近の分析において大きな役割を演じている。畏怖の情動は、重要な美的、道徳的、そして宗教的特徴をもっている。ケルトナーとハイトは、「知覚された広大さ」と「適応」の二つの特徴が畏怖の経験にとって中心的であると論じている。「広大さ」は知覚的に方向付けられた用語であるが、自然の領域の純然たる物理的大きさが生み出す衝撃とその結果として生じる圧倒されたという人間の意識を強調している。この広大さの経験は、適応へと至る。ここでの適応とは、新しい経験



S. Ashina

を同化することができない心的な諸構造を調節するピアジェ的なプロセスである。

畏怖が適応に関してであるのに対して、理解は同化に関するものなのである。

39. 畏怖の経験を引き起こすもの。多くのものは、風景あるいは他の壮大な景色、あるいは竜巻のような自然現象のように、自然のものである。しかしながら、同一の経験は他の刺激、それには大きな建物や大理論、あるいは神との出会いも含まれるが、こうした刺激によって引き起こされる。これが示唆するのは、自然神学と礼拝との間に、たとえば、両者は実質的に同じ心理学的応答に関係するという点で、重要な結合の可能性が存在するかもしれないということ。さらなる探究が必要な領域。

### (7) 美と美を「見ること」

40. 現代の美学的考察における最も持続的なテーマの一つは、自然の正しい評価が自然とは現実的に何であるかについての理解に依存するということである。美的評価（あるいは判断）は、それが美的対象の固有の本性に対する応答である必要があるという意味で、「客観的」であることを必要とする。自然科学は自然とのいかなる美的関わりにも不可欠であると主張する者もある。[281/1]

41. イギリスの哲学者フランク・シブレイ (Frank Sibley, 1923-96) の主要テーマ

シブレイにとって、美学はわれわれが事物をいかに見るかということに関係する。美的対象には、未熟な目によっては識別できないある性質が存在すると、シブレイは考える。美学は知覚の高められた形式に関わっており、そこにおいては、事物が特定の仕方で見られるのである。美学の中心的課題は、芸術家に対して、「人々が芸術家の見るものを見ること」ができるようにすることである。実際、見るべき何かが存在している。しかし、注視し見分ける行為は習得されねばならない特定の能力を要求するのである。

### [281/2]

42. 事物を適切に理解するためには、それらを正確に「見ること」が重要であること。

自然の存在論、すなわち自然を現にあるがままに理解することが、自然界に対する人間の美的応答を形作り導く際に決定的な役割を演じていると論じられるのである。しかし、このような存在論はいかにして確立されるのだろうか。それは自然科学にのみ基礎づけられると論じられることもあった。

↓

自然科学的な「説明」よっては、人間精神が自然の美のある側面に対して鈍感になるような仕方で自然が眺められるようになりかねない——たとえ、自然科学がその側面とは別の面を明らかにし、あるいは高めるとしても——。

43. この懸念は、確かにゲーテやジョン・キーツのような著述家によって表現された。

キーツの考えによれば、科学が提供するものは自然の還元主義的な説明であり、それは、結局は「共通の事物の退屈な目録」に過ぎないものを提示することによって、自然固有の驚きを減じる恐れがある。

アイザック・ニュートンがプリズムの色彩に還元すること（キーツが「解体」として言及したプロセス）によって虹の詩を破壊したと論じた。

44. キリスト教的視点から、自然の美の正しい認識は、次のように解釈できる。すなわち、それは、永遠的なものの一時的な直観であって、途方もなく転換する力に満ちた重大なるものを手渡してはくれないが、それを指示し、このようにして、人間の魂の内に不在

の感覚と憧れの感情を引き起こすのである。

#### (8) 美、自然神学、そしてキリスト教の弁証

45. キリスト教信仰を推薦する際に、自然の美が重要であること。

シャルル・ボードレール(Charles Baudelaire, 1821-67)の、「美しいものへの不滅の直感」。ボードレールの根本テーマは、世界の内の美の経験が人間の本性の内により深い直感を目覚めさせること。人間の本性は、その美の成就に憧れを抱き、さらにそれは「彼方にあるすべてのものへの飽くことなき渴き」を生み出す。美は応答を求めつつわれわれに呼びかける。「美しい(kalon)ものは、呼びかけ(kalein)から来るものである。」<sup>1)</sup>

46. アウグスティヌスは、若き感受性の強い修辞学の教師であった日々を振り返りながら、美に魅惑されてきたことを思い起こした。美とは、それを注視する者から意味深い応答を引き出すのである。

47. 「さて、それが美しくないとすれば、われわれは何かを愛するだろうか。では、美しいものとは何か。美とは何か。われわれを引き寄せ、われわれが愛するものにおいてわれわれを喜ばせるものとは何か。それらの内に恩恵と優美さがなければ、それらはわれわれを自らのものに引き寄せることはいったい可能だろうか。」

48. アウグスティヌスの意見が弁証論的に重要であること。もし、神、イエス・キリスト、あるいは福音の諸観念が「美しい」とは考えられないとするならば、それらが、人間の知性に対してなす訴えに先立って、固有の引き寄せる力を所有することはないであろう。

49. 自然の美の認識は、人類の共通の洞察である。それは、キリスト教信仰に限定あるいは制限された洞察や判断ではない。文化一般の内に、とりわけおよそ一九八〇年以降、哲学的領域の内に、美に対する関心が新たにされたことについては、豊富な証拠が存在する。

メアリー・マザーシル(Mary Mothersill)：美を「美的な諸特性によって快を生み出す配置」と規定している。自然の秩序化あるいは合理性の知覚は、キリスト教に制限されないが、このような秩序の根元であり完成者である神の信念への導きの役割を果たす可能性がある。美の認識は、まさにそれに匹敵する仕方、知識に基づくキリスト教的弁証の基礎を提供することができるのである。

50. 一九八五年十一月に、ケンブリッジ大学におけるレスリー・スティーブン(Laslie Stephen) 記念講義で、ジョージ・スタイナー(George Steiner)は、キリスト教創造論に基づいた自然神学がいかんして伝統を超えた美への訴えに対して基礎を提供できるかを指摘した。

同様の論点がロバート・ジェンソン(Robert Jenson)によって提出された。

それは、ジョナサン・エドワーズ(Jonathan Edwards)が、いかんして神の聖性と美との間に、完全な同一性ではないにしても、緊密な相関性を見出したのかを探究することである。この相関性は、エドワーズが「自然という書物」と出会うこと(そしてそれを読むこと)に対して、きわめて重要な意味合いをもっていたのである。

51. エドワーズの神についての洞察は、一方で、神の美に集中し、他方では、認識されることを神が望むことに集中している。

神は自己陶醉や自己内省には満足しない。創造におけるロゴスとしてのキリストの役割を強調することにおいて、エドワーズは世界が神的美を映していると論じる。

52. 「われわれが花一面の草地や優しい風のそよぎを喜ぶとき、われわれはまさにイエス

S. Ashina

- ・キリストの甘美な慈愛の流出を見ると考えるかもしれない。香りよい薔薇と百合を目にすると、われわれはキリストの愛と純粋さを見るのだと。だから、緑の木々と野原、そして鳥のさえずりは、キリストの分限の喜びと恩恵の流出なのである。木々とつる草のおちつきと自然らしさは、キリストの無限の美と愛らしさの影である。澄みきった川とさらさら流れる小川にはキリストの甘美な恩寵と恵み深さの足跡が印されている。」<sup>1</sup>
53. 神は神的美が被造物によって知られ享受されることを望んでおり、それゆえ、その美が創造を通して伝えることを選んだ。自然は神の美を開示するように意図されており、人類が神の栄光をいかに知覚し信仰と畏怖においていかに応答するのかを学ぶための希望の学校として機能するのである。
54. エドワーズが神の美を強調ことの弁証論的な意味合い。  
エドワーズにとって、合理的論証はキリスト教的弁証において有益で重要な位置を占めている。しかしそれは、弁証家の唯一の源泉ではないし、おそらくは主要な源泉でさえない。真の源泉は、神的美の把握であり、それは神の美の知覚を通して生まれる。
55. エドワーズの議論は重要であり、詳細な考察に値する。彼の分析の核心は、合理的論証は回心させないということである。それらは、回心への障害を取り除くかもしれないが、それ自体独力で、人間を転換する力を所有してはいない。それよりむしろ、われわれは、「神的事物の霊的な美と栄光の把握」を伝え、あるいは引き起こすことを目指さねばならないのである。神的美の啓示が目的とするのは、栄光を垣間見ることによって人間の想像力を捉えることであって、合理性の印象によって精神を単に説得することではない。
56. しかし、このような戦略は自然界に限定される必要があるだろうか。人間の文化、そして美を単に観察するだけでなく創造しようとする試みはどうか。ハンス・ウルス・フォン・バルタザールのより重要な成果の一つは、「美」の観念に焦点を合わせることによって、このようなアプローチが、純然たる自然界との出会いを遙かに超えて、人間の文化の世界を包括するように拡張することができることを明らかに示した点である。  
リチャード・ヴィラデソ(Richard Viladesau)：超越的なものへの憧れを指し示す、あるいはその憧れを創造する美術と音楽の能力。
57. ジョン・ヘンリー・ニューマン(John Henry Newman)の著書の内に見出される。彼の偉大な大学での説教の一つにおいて、ニューマンは、音楽が美を表し、世界内に観察される美の痕跡の真の源と出会いたいという人間の憧れを強め得ることを指摘した。もし、事物の秩序とのより深くさらに根本的な結合が存在しないのであるならば、どうして、人間の創造物であると言われる音楽に、このような応答を喚起することができるのだろうか。
58. その美を自然の内にもしくは文化の内にもしくは求めるかに関わりなく、人間の美への探求に基づいた、最も重要な弁証論的戦略は、おそらく、C. S. ルイスに負うものである。実に、ルイスの初期の著作は、美の概念と神へ導く——あるいは神から離れる——美の力への関心を示している（これは『天路退行』The Pilgrim's Regressのテーマである）。後期の著作の一つ、『われわれが顔を持つまで。書き直された神話』(Till We Have Faces: A Myth Retold)はまた、美への、\*<sup>(95)</sup>とくに美の墮落と可能な再生への没頭を示している。
59. 人間の美の探求は、キリスト教福音との重要な接点。一九四一年の説教「栄光の重み」

(The Weight of Glory)の中心テーマ。「われわれ自身内に今なお見いだす遙か彼方のわれわれ自身の国への欲求」を持っていると論じる。はかない世界において出会うどんなものよりもより実在的な理想を喚起する。すなわち、美は、われわれが現在はそこから追放されているうっすらと記憶している領域への憧れの感覚を呼び起こすのである。

60. 経験は消え失せてはおらず、また消え失せることはない。「美の探求」は、実際には、その美の源の探求である。美はこの世界の事物を通して媒介されるのであり、事物に含まれているわけではない。<sup>1)</sup> ルイスにとって、欲求、憧れの感覚はわれわれのもとに留まり続け、「未だなおさすらい続け、その対象は不確かなままである」。
61. 美が言うに言われぬもののメッセージを伝える使者であり、われわれは、それを垣間見るが、やがてそれがメッセージそのものであると信じてしまう。それにもかかわらず、われわれはこの知覚を評価し直す。

キリスト教が提供するものは、根源的な欲求を満足させることができるが、その一方で同時に、その時点まで気付かれぬままにとどまっていたその欲求の要素を顕わにするのである。この欲求は、「われわれの現実の状況の最も真実の指標」であることがわかる。それは、今われわれが切り離されていると感じる宇宙内の何ものかと再統合されたいとの憧れ、われわれが外側からいつも見てきた扉の内側にいたいとの憧れとして、理解されねばならない。その欲求は、「自然を通過し、自然を超えて、自然が途切れがちに反映する輝きの中へ進み行くように」との呼び出しなのである。自然は、それが指し示すより偉大な実在の「最初の素描」、「単なるイメージ、象徴」であることがわかる。

62. 美は、特殊なものの可視的世界の彼方の領域を指し示すことによって、真理を顕わにする。美は、今は閉じられている扉の向こう側を見、それが開かれ、その敷居を横切るのを期待することを可能にする。「われわれはわれわれの知っている輝きと交わることができない。しかし、新約聖書の全ページは、それはいつまでもそのようであるとはかぎらないだろうとの噂にざわめいている。いつの日にか、神の思し召しがあれば、われわれは中に入るだろうと。」
63. 「野の百合を見よ」(マタイ六、二八)。野の百合ははかない秩序の一部であり、その美は結局のところ色あせるだろう。しかしながら、本書で試みてきた自然神学へのアプローチは、美のはかない瞬間が保持されその真価を認められ、そしてそのより深い意義が把握されることを可能にする。しかし、美に対しては、自然の正しい理解以上のものが存在している。現在は部分的にしか知られていないものが十全に経験され始めることへの期待である。インマヌエル・カントは、『判断力批判』(一七九〇年)において、美が善の象徴と見なし得ることを示唆し、それらの間の関係性の問いを切り開いた。
64. より最近では、哲学者イレーヌ・スカーリー(Elaine Scarry)は、美の重要性を強く主張する一方で、美の追求にはわれわれの世界に対する注意力を研ぎ澄ます「持続的な知覚の鋭さ」が要求されると見ている。

美しいものを注視するとき、われわれは世界を気遣うことができるようになる。また、世界を気遣うとき、われわれは不正義に気づく。スカーリーが述べるように、これは美と正義との繋がりを確認させるものとなり、それによって当然のこととして、われわれは自然神学における善の位置を考察するように促されるのである。